

東京基督神学校におけるギリシャ語の授業風景

本馬 信義

この度、どのようなギリシャ語の授業が行われているのか、様々な方面から報告するという企画の中、私の卒業した東京基督神学校におけるギリシャ語の授業についての報告をするようにとの依頼があった。簡単ではあるが、自己紹介と学校紹介をした後に、東京基督神学校におけるギリシャ語の授業について報告する。

私はキリスト教教会の牧師を務めている者である。牧師としての務めとして第一にあげられるのは神の言葉である聖書を宣言していく事である。それゆえ、私が牧師となる過程においてその聖書を正しく読み取る訓練が必要不可欠となって来る。そのため、私は神学校へ入学し、そこで聖書が伝えるところを正しく聞く訓練を受けてきた。

私は牧師となって、はや二年が経とうとする者であるが、継続してギリシャ語の学びを神学校卒業後も続けられる事を感謝している。昨年広島大学文学部のギリシャ語講読の講師であり、日本ギリシア語ギリシア文学会会長である竹島先生との出会いが与えられた。そして、そのギリシャ語講読のクラスに参加し、そのクラスの中で新約聖書を読み進めるというチャンスに巡り会えたのである。その広島大学文学部のギリシャ語講読のクラスでは、はじめ、「ヨハネの福音書」をしばらく読み進め、その後「ローマ人への手紙」を読み終えるに至った。また、このクラスでは、暗唱を大切にし、現在私は「ヨハネの福音書」の一章を暗唱し終わったところである。新約聖書をギリシャ語で読み進めるときに自分一人ではなかなか分からないギリシャ語の構文を具体的にどうつながっているのかそのクラスの中で教えられ、またギリシャ語に慣れ親しむ事もでき、新約聖書を読み進める事ができることを喜んでいる。

東京基督神学校におけるギリシャ語の授業風景を報告する前に、その東京基

督神学校がどのような学校であるのかを紹介する。東京基督神学校は、一九四九年に東京で開校されたプロテスタント系の神学校である。現在は他のキリスト教大学等と三校が合同をし、千葉に学校法人東京キリスト教学園を設立している。その学園の中で東京基督神学校は大学卒業生対象の専修学校として、牧師や宣教師らを育成している。

この東京基督神学校は専門課程であり神学科としての教育を提供している。三年でその専門課程を習得するようになっており密度とレベルの高い教育訓練を行っている。学生数は私たちの年代は一学年十名前半であった。その中の男女比はその学年によって異なるが私たちの学年では二三割程度が女性で、七八割りが男性である。日本人だけでなく、韓国や米国などからも共にこの神学校で訓練を受けている。

さて、東京基督神学校におけるギリシャ語の授業風景の報告に移る。まず、何といたってもギリシャ語というと私の場合、ギリシャ語を教えて下さった伊藤先生抜きにギリシャ語を語ることはできない。

先生のギリシャ語の授業でとても印象的であったのは、神の言葉である聖書に畏れを持って正しく聞くという姿勢である。神の言葉である聖書を軽々しく扱おうものなら「なんてことをするのだ」と言われる。

これに加えて印象的であったのは、その教え方のとても丁寧なことである。学生たちがギリシャ語を習得できるように学生たちの理解の程度にあわせてクラスを進めてくださった。また、よく学生の質問に応じてくださり、しっかりギリシャ語を理解することを助けてくださった。

先生は、聖書が神の言葉であると同時に人の書いた言葉であるということとその都度教えられた。そして、当時の聖書記者たちが用いた言葉や思想、文化を知ることが聖書を理解する上でとても大切である事を教えられたのである。この聖書が神の言葉であると同時に人の言葉であるという事実を私共学生が理解する事は、私たち学生が聖書に正しく聞くために、聖書の原語であるヘブル語やギリシャ語、はたまたその当時の生活環境や思想等の背景を学ぶことがいかに大切であるかを知る土台となっていった。

さて、ギリシャ語というと初めに思い出される先生について紹介した。では、実際神学校ではギリシャ語の授業をどのようにして進めるのであろうか。

まず、ギリシャ語を含めて神学校のクラスで学ぶ場合、クラスの初めと終わ

りに神に祈る時をもつ。この学びを神様が祝してくださり神の言葉である聖書を正しく悟る事ができるように、またその私たちの学びへの取り組みが助けられるように等々を祈るのである。

クラスの始めの祈りが終わると、教科書についている先回学んだ課の練習問題を一人一人黒板に解答していく。先生がその答えを確認し、指導をするところがあれば指導する。またその前に、ギリシャ語の単語や変化の小テストを行うこともよくあった。その後、教科書のその日学ぶ課に入り、先生よりその課の文法についての説明がなされる。そして、そこで質問がある場合は質問し文法等の理解を深めていく。そして、その課の説明が終わった後、最後に祈って終わるのである。

ギリシャ語の文法のクラスで使用されるテキストは、J.G.メイチェン著、田辺滋訳（1985）「新約聖書ギリシャ語入門」（ニューライフ出版）で、クラスはこの文法テキストに従って進められていく。テキストは三十三課に分かれており一回のクラスで約一課進んで行く。クラスの時間は一こま一時間 50 分で行われ、週に二回のギリシャ語文法のクラスが行われる。

ギリシャ語文法取得のために通常一年がかけられる。そして、最後に期末テストが行われる。テストの内容は、変化表に始まりギリシャ語文を日本語に訳したり、日本語文をギリシャ語に訳したりする。また、ギリシャ語から日本語に訳すときには、その文に出て来る動詞をパースする。テストは六十点が合格ラインで、そこでテストをパスできなかった人は、追試がなされる。かつては三ヶ月で、そして最近まで半年でギリシャ語文法を習得することが求められていたことも付け加えておく。

ギリシャ語の文法をパスするとギリシャ語講読のクラスに入る。ギリシャ語の講読のテキストは新約聖書である。このギリシャ語講読のクラスも文法と同じく一年間で習得するカリキュラムとなっている。私たちの年代での講読のクラスでは一年の前半に「ヨハネの福音書」の四章から五章までを講読し、一年の後半で「ローマ人への手紙」四章から六章までを講読した。

ギリシャ語講読のクラスの進め方はいたって簡単で、順番に学生たちが聖書を一節づつ読み進めていく形をとる。まず、初めに聖書をギリシャ語で読み、その箇所を訳して行く。その後で、先生がその答えた学生にその聖書箇所の動詞のパースをするように求め、学生はそれに答えて行くのである。

先生はギリシャ語講読を進められる中で、そのままどんどん読み進めていくのではなくて、アスペクトについてや、談話分析等についてもその都度教えら

れた。また、従来訳されてきた聖書の翻訳と原典では解釈が異なるような時等、ある特定の聖書箇所を取り上げどのようにして解釈していけば良いのかを教えてくださいました。

講読のクラスで使用された新約聖書の原典は、1979年に Deutsche Bibelgesellschaft Stuttgart で出版された *Novum Testamentum Graece* の第26版である。また、辞書としては Walter Bauer (ed.) (1958) *A Greek-English Lexicon of the New Testament and Other Early Christian Literature*. Chicago and London: The University of Chicago Press を薦められる。

先生が講読のクラスで度々引用していたテキストは Stanley E. Porter (1994) *Idioms of the Greek New Testament*. Sheffield: JSOT Press である。

このギリシャ語のクラスは文法と講読を併せて十二単位である。神学校で学ぶカリキュラムの必修科目の合計単位が当時で百十六単位であり、その他にも選択科目をかなり取得しなければならない。ギリシャ語はその神学校の学び中の一科目であることが分かる。ギリシャ語の文法は必修科目であり、ギリシャ語の講読は私たちの年代から選択科目となった。カリキュラムとしては、このギリシャ語やヘブル語といった聖書原語の他に、聖書神学・神学・歴史神学・実践神学・論文・その他がある。細かい内容としては、もちろんここに書き記す事はできないが、聖書の概観や聖書緒論、釈義であったり、教会の務めに関する事であったり、哲学や日本の宗教について学ぶ事まであったりする。もちろん、日々の祈りや礼拝を始め、各奉仕教会での務めがカリキュラムには含まれている。

さて、神学校でギリシャ語を学び、一体どの程度までギリシャ語を習得できるのであろうか。答えはもちろん各人によってまちまちである。しかし、三年間のうちに膨大なカリキュラムののっとなって各クラスを習得していく中で、その習得に費やされる労力にもそれなりのバランスが必要となってくる。その結果私個人の場合、基本的なギリシャ語の文法を習得し、実際にギリシャ語で新約聖書を自分自身で時間はかかっても読む事はできるくらいの程度を習得するのが精いっぱいであった。もちろん自分自身は、そのギリシャ語の習得を心から神に感謝している。

実際問題として自分自身神学校を卒業し、牧師となり、「ヨハネの福音書」を毎週日曜日の礼拝の中でメッセージをしてきたが、始めのうちは、単純に「ヨハネの福音書」を十数節ギリシャ語で読むだけでも、半日以上は最低かかった。

現在では、日々の積み重ねと、何よりギリシャ語を継続して学ぶ機会がこの広島大学で与えられる中で、二十節近くを一二時間で読む事ができるようになったのである。

さて、簡単ではあるが、以上をもって東京基督神学校のギリシャ語の授業についての報告をここで終える。読者の期待や関心にどれだけ応える事ができたかは疑問であるが、聖書に聞くためにギリシャ語にこのように取り組んでいる人もいるのかということを読者が知っていただけたら感謝である。今年の春からは読書会と言う形において広島大学で新約聖書の「コリント人への手紙」を読み進めていく計画がある。また、同時に「ヨハネの福音書」の五章を暗唱していくことを考えている。新約聖書を原典であるギリシャ語ですらすらと読み、神の言葉である聖書に、日々自らがまず原典で神の言葉に聞く事を願っている。そして、神が私を通して神の言葉により教会を導き育て養って下さる事を願っている。また、人々にこの神の救いの言葉が宣べ伝えられ、人々が神の言葉に聞き、神を信じるようにと願っている。

最後に、現在私を暖かく御指導下さっている広島大学の竹島先生に感謝の意を表したい。